# 大和名所記 第三

2906
572

ル 4
4873
3

2906
572
4286

門 N 1
號 1873
巻 3

# 和州舊跡幽考目録

第三巻添上郡

真福寺 付南大門○薪能○四座太夫○佛生會
○中金堂釈迦○東金堂薬師○後戸釈迦三尊
○西金堂釈迦○自然涌出観音○南円堂不
空羂索○銀の観音手躰○日輪山額○北円堂
○講堂○維摩會○五重塔○月日宮○東院
西堂の末 崖鞨賊天 付吒天宮
○眠宮○三重の塔○般若石手
一言主社 付木患樹○興福寺再興○法相伝来

38- 0060

○仁明天皇寶祚賀事
中院屋
松室　付仲麿已講事
花林院
菩提院児観音菩薩
猿沢池　付采女宮　○楊貴妃楊事
東轉橋
大和国名　付十五郡名　○国の数事
大和路　付中津道
奈良
奈良大路
着楯
八重楊
勧修坊
大樂院　付隆禅廟事
雲井坂
一樂院　付定照僧都事



奈良坂般若路
般若寺　付観賢僧正
○再興　○伐木禁制事
悪左府墓
奈良坂瀬人
三間寧都婆
佐保殿
奈良坂
佐保川
梨子原　付東大寺八幡太神の新宮事
寧川坂本陵　付韓國社の事
寧川の宮
寧川阿波の神社
寧川の社　付三枝祭事
悲田院
餅飯殿町
誕生堂

元興寺付観音事　極楽坊付智光法師
○曼陀羅事　仙光院
竹塔院付護命僧正○法論味噌事
禅院寺　奈良飛鳥
奈良飛鳥川付福智院の事
十論院付魚飯塚○南光院の事



# 和州舊跡幽考第三巻

## 添上郡

### 興福寺

寺領二万千百拾九石五斗余
興福寺又乃名ハ山階寺ハ大織冠山城国宇治郡小野郷山階の村陶原乃家より居住し給ひし時造営ありしより山階と名付給ひしなり帝王編年其の時欽明天皇三年と書又乃説天智天皇即位八年嬪室鏡女王大織冠の妻ときあり礼記順市ありて後ハ天武天皇白鳳元年ときに市を厩坂ハ厩坂寺と号ける厩坂寺とハ威衰記そまてより元明天皇和銅三年春日乃地ようたしくうまし漢海云乃造営ありてもと乃名称あらあ興

福寺とも釈書盛衰記ともに和銅二年とあり妙明天
皇三年より延寶七年迄凡千廿四年の和銅三
年より凡九百七十一年の五重塔婆の法水は
依保川乃ながれ法水は
讃ハ三笠山乃風万代とよぶなまばるや度毎の
英上ハあまどもむすびよりつらぬ覺乃折又ゆく
こそ如ぼく結身

▲南大門ハ二王像ぞうこんりうこうあり四天王乃太史毎二月七日より法とめくす十
四日よりの史彰乃能ハ弘仁十二年無福寺
乃東金堂廿八相乃元西金堂廿二相の元六
十種乃香花をとりぐり擁護乃祖神擁護の
法神と勸請して信奉とりる仏法令るりは



畫彩色ぞうこくをぞ加ぶくりやうぞ山
時ろあ人西金堂乃場ぬて靠りぬでける
と我ぞ後清和天皇貞觀六年よりぬとせがを
ぞ波うり貞觀十年乃事うとよ元乃事さ
ろりて風本ぞうりんのづち山をぞ
うぐぶ吹行末の芝をひるぐ人尺事大象乃西
ぐへをとりもたやくぬ丸乃ぬき行ハ如彩乃定
ぞうぐ川を如ろぬて絶元一川西金堂の
前よあ彩くぞうをを南大門乃芝よぬけ
ぬ鞍しう吹引ぐに元よ龍尾を秋乃本乃
蒙ぬみぐをよとぬうぐ柱ぬ龍
菊乃の人如をとりもぐ龍を兵屋ぬぞの
りぞるもうるぞあり事るやと

大元帥天王の宣旨をうけ給はり
天下の信罪あはれ天子の乃然四海を戒おさめ
我國乃正法法をよ乃ぶんと願をよりてそ行
それ大元帝儀まちまちにまして兵乱權護乃
神乃法會乃ゑ紀とゞめよそ侍りなんと蒙勅
同して終に行おこなはれ西金堂乃法會を南大
門ようにしてをこなはれ兵乱鎮定南大門よ
ぬけうるゆへそ安らかにまもりこゝに人奉りる
でまる同仏乃まゝ乃ゝて神をそ法とめ給ひ記
毛勅乃紙の鑑鑑し 延寶七年と九八百寸
二年う柳四座乃役者乃むりをこゞねるよ
ゆ悦まちまちにまうよ聖徳太子の飯乃奉河
勝よ知ぬをく六十六番乃面をたうさせ紫宸



殿乃前まして奉行乃法ようにたうさせ給ふ
神樂乃ゝくうるまゝバとて神の宮をいりちく
申樂とゝ若ゝを給をるとゝや源氏 枕草子 拾遺 桜川院
乃直附閑信和の法神樂乃紙燭事家綱とあ
ておよひめづらしくうるん申所をうまつまと和
せどありうは給りて乃紙をまれをさよ
とて指せどの法ゝ人家綱ゞ指よりあり庭
火ちゝ燒うるよたゝ法ゝ引あぎくわそ
を紀をんゞてうるゝ乃乃ゝけくさりよ
ゝゝまちむゝよ物りを物ゞりをありちりあ
物んとゝひく庭火ゝとめゞりたりてゝまそ
入るんと指りあゝをゝに行紙法もありるん法ゝあ
まゝで大やを乃法およそ八びんゝやとゝれば

家綱むべ多りとうれづく殿上はあるよ事ぞ
うまんぞうんと海こと世絵ふよ家綱めをめをば
家綱あく海をる事あるを入り海こ
をみく行綱めをやへぞ海とにさむげ
るりけ紀てひぐ紙をまでう紀あげく
おそを紀をぐーまれあ紀はむげあるとあそ
りみく鯨の梅けくさりみくはむ紀よ梅を
ちう梅ぐりをありちうあぶんとひく魚をを
十二三段ぐりめぐりちうて入り上中下
大くどみうきりうきてうハみけ
までも見ぬ乃中ぐあぶくもあうぞとてあ
ちをよううぐりきるとを星をむーう中赤と
ふあるそ侍り宇治拾遺より後今の世乃德よ

ハりうりきりその時代をうれ中門みて
四月八日よ佛生会ありぬ人乃樂あり儀をる
るう海ぐりをふ
▲中金堂八釈迦如来二菩薩多利 釈書ハ東西よ二
基乃鐘樓ありハ堂造ぐ乃とハ皇極天皇元
年日本記 二年十一月蘇我入鹿山背大兄王るとう
ちりうりうハ紀海ひ海うよあくまぐおこれ
利我家代宮殿とハひるを紀まるをりをふ又
遠心不乃にあうるく紀よ中大兄まるを天智帝
中臣鎌足とるげ紀絵ふ帝と輕まるを孝徳帝
う乃入鹿と謀ー絵をんぬをりこと紀めぐ
絵ふ又海足ちのひ紀こ
と海うるく沙よ四月六月宮中ゆて入鹿

とうら給ふ（釈書）仏時乃さく日本紀よりこまうり
きく荘氏繁昌ありし又猶廷云乃遺言あきバ
とて濱海云真獨寺紀とて仏釈迦の像をまつへ
ふきこうり（釈書）中金堂皇ありし 相仏釈迦乃像
乃みうしたうらよハ大織冠乃ものとり乃中よ
おさめてつよ偽給ひ 狐乃釈迦三すの
像とあるきこうり（帝王編年）食堂ハ金堂同時うり
濱海云建立とそ沙元し
▲東金堂ハ神亀元年（御願孔記感裏記）七月大上
天皇（元正帝）御惱乃時玉體安穏乃由乃りよ聖
武天皇乃由建立藥師乃像をとて給ひし
うり釈書よあり
南堂乃後戸よ釈迦三尊九霊佛あり鑑ハ

敏達天皇八年十月新羅國より枳叱政奈末み
法紀元年ありびよ仏三尊をなるをみよ仏像
甚霊ありし紀うとみねきバ
きさいたひとう紀若るひこうをばもさハ
ひ紀由ね紀命紀法めん（日本紀）ちうありうり
帝敏崇供養由うて後仏堂よまつ也絵
（釈書）仏号像ハ大織冠乃由如尊乃観音虚空
蔵乃三尊ありし（孔記）仏佛ハ京波斯国王紀
うり給ひくしうけ一尺二寸（二尺八寸と云云）（絵見の人曰唯像ハ）
め立臺山ようたうなり其後百濟乃聖王
とみ給ひ次よ新羅王也とうやまひ給ひくし後
仏国よとうり給ひ
ひて本元真寺とうとうきまるぞ安堂なうき

きるの寺の後あてまぞうけちをきる 玉林抄

▲西金堂八天平六年正月十一日光明皇后御母橘三千代氏乃法名あり 水後太記

釈迦如来二菩薩羅漢神王等乃像を造られ

うり 釈書 此等像八市度健駄羅国王乃后あり生

駄乃観音ぞ御なりぞハあるとちらひ給ふ

よ法花上よ人法華ゝて日本乃国王乃后光明子

うぢ生駄乃観音ぞ法華ゝ世ぞ尚なるぞ

え給ひく法華ハさあうり仏事ぞ

ありうれハ群臣儀してけんうるぞ死人よあり

ぞ后又ゆ死給へうよあうぞ長そのうちをうり

しなうんよハ志うぢとそて巧逃と日本国ぞてう

さまきる巧近仏よ法ちゝくゝゆ蓑関と称る



光明皇后我母乃法あよ仏をけうりあんさい

うし母をざみくえ法せよ則釈迦乃像ぞけうり

眉間乃毛を入うんとをうちよ像をのぞうよ光明

をうち給ひしうば信仰腐うち感応神

よあまりてゆやゝ形とて毛ぞハ入ぞりよ

死苗堂乃中ぞ光ぞ極光明皇后乃法うく

ちをうけしうりをうあうよりをるゆぞ法順礼記

又自然涌乃観音乃像年家苗堂よあり抑

仏像ハむう仏法院の仏圓仏都とてあり

壽廣巳像を相ぐうて尾張の西ぐうけぐ

志よ賀波とゆふ所のうぐ池乃ぞうりて

巳像くと呼ぞあり誰ゆとうりれども

人ぞうよあうくよあるもけバ呼くる

狂よりはやとあやしくてこれをよせたるまくらに行ぬきバ
四方守よ十一面観音の像はよそありなる
ゆゑんうせくとも口紀まへんぐ紀と皆厨なり
てぞ南都よりくるる先南大門よりまへんなり
けぎき乃堂よりはうを給ひるゑんや也大花食殿志
て金堂よりそぐめ廊ぐひくる紀入まんとを
きぐも像はくあり給ひくく千万人ちうう
るもくるひけ屋うをあらぐ堂毎ようぐ
へどもくくをあり給ひぐ西金堂とんよ
ぐけくくあぐくを給ひくう西金堂まへ
らまくるとぐ威裏紀

▲南圓堂ハ弘仁四年よ遠忌釈書不空羂索ぐ
びよ四天王の像紀まへくう書光ハ内麿乃ぐう

給ひくるやとあり水流又弘法大師ぐう給ふるも
へり威裏紀山胃索乃像ハ三月八膺丈六なりて由火礼紀
たの山廊よ廊の皮紀くけさ也給ふ春日大明神
廊紀あひく給ふよりその因縁とぐ図へく柳
南円堂乃盧鱸ハ清海乃後参議中衛大将
廊前ぐ乃ふ大納言まの雅ぐの子右大臣内麿
乃三代と上二代乃ぐくけくんぐやありうむ内
麿乃子名副の大臣藤原乃おとうへぬる事紀
げ紀く弘法大師よりあぐくく真務寺よ
南円堂紀ぐくんぐりくれうりされうり正統記志ぐあり
くれども山まく伝願法ぐうげるよ弘仁三年
十月六日内麿ぐ十六りよしてうせ也給ふより
名副光秀乃心ぐ紀ぎひく弘仁四年よ

造建あり（出順礼記）板山地底より銀乃観音乃像一
子躰をおはす（詞林採葉）壇代きびの紀給ふは春日
明神老翁を現じ給ふ史より海づり一首をうく
ひ給ふ（威裏記）

（新古今）補陀洛の南乃巻より堂そそ此菊多み今ぞ法乃
山頂ハ鬼乃ありてらあるとも此ふうきにけれ
ゆ只春日明神乃此使として寧河明神御
じ給ふと神中抄より八月ふうこうう又観音乃浄土補
陀洛山ハ其山乃うちハ角ゆて菊波常盤より
ありそ乃山を表して此堂を八角より法うき
うり（威裏記）其後菊氏繁昌乃ようにうく歌書
よあり房前大臣ハ菊氏田家のうちより此家の
祖よりそありきる又あてよりて法華会執とこる

くうく為世ゆ三年より一度ありむうけ毎九月
晦日よりはじめて十月六日より紀内麿乃此
忌日ゆまいりあり云事根源よりうくあり此堂の
前より俗より菜切山とゆあり是ハむうく真福
寺乃南大門より目輪山乃額ゆけうきてよりや
ゆ乃事ゆ伝り法きばる変ようにうり額源
ゆ乃事

▲北円堂ハ梅多蘇佛（泥勤宝号）ゆ生へうり養老六年
八月三日元正天皇元明天皇此心ゆひうりて
清海云園忌乃とうりより此建立あり（水流清海云）
八養老四年八月三日ようを給ふあり（大流）
▲講堂ハ弥陀三尊あり又浄名居士乃像をまへさ
ア（威裏記）是ハ長屋大臣乃建立武智麿の女ゆ

[illegible]よ同年癸巳の大臣の[illegible]あり遠江の
国文光明皇后乃出建立ともいへりいつれを正書
紀ともいへ實めて維摩會をたてあらるむら
しハ十月十日より十六日まとり記延喜式大
織冠乃忌日なり根源抄 當世ハ天平年月はく
まうそ出會るハ勅使をくしてせ給ふ又ハ
とめうまつるまつりハ僧正乃任をうけ給ふ更維摩
會ハ弘仁卿天皇二年大織冠山城國宇治の郡
小野の郷山階の村陶原乃家にして多武峯記ハ
例るうれいくしきものをもくふうをうり百歳の
人もくいきのとふ尾そありをる大臣よりはく
我大家を拾そ右維摩經とふそ乃經乃
中ハ同疾品あり是維摩詰ハ居士なるやと

おもうせ給そんとうはくはくして出一品を演もるよ
いまさをうはくはくりハ病ハるをうを給ひ記大臣
饗前會掌にて生くせくせくに大家ハ俗そんとち
うに給ふ根源 ちうあまきハ弘明天皇三年出會代
山階寺にてはじめ十二年にはくとこるに給ふ
書紀 天智天皇八年己巳年大織冠薨し給ひく
うり世六年そ源うりをる文武天皇芸雲元年
更ようはじめてをこるつまうり帝王編年又乃院ハ元
明天皇和銅七年出會を興福寺にはくー給ふ
記出會九百ようてをこるつまうハ元年中にて
四十二年ようそうり侍りとあり水後そ是より後
流る事あうはりをるとそ根源 抽又延暦廿一
年出會ハりて行幸べうはるう宣旨ありて

そのやうは真福寺よりそとよりあらまほしきる水流て
北會はそのあひだ〳〵ゆくを國〳〵にはとうやはは會はよよ
むかしの縁起は小野天神の御筆うけ給はり〳〵こと
神のことばのよはは三國よりあえ會は真福寺
よさ〳〵ゆり朝の朝こそ年は法會はちらうめぐて
あそばしまつりとゆんは根源又むかしは會は講師の
僧は宮中最勝會の講師をたとめ續日本後紀又
帝釈天の御れよりたる撰集抄ひとすじ兎
會とぞ〳〵作り

後拾遺集 山階寺は涅槃講よりでて讃作る

真別当の遍よりあつりとも今の源ぞ多きなり法師 光源法師

白川殿七百首 維摩會をとめる

神無月の時雨とをけり法とて多の都よりある言葉集 新大納言頭朝



▲五重塔は天平二年四月藤の皇后のひよ供
射房前文武の乃作りさ〳〵式は材を引色地
御ゆ〳〵捨ひ〳〵建立あり 釈書 貞観十八年七
月七日寅の時山塔震動して十九日はぐやは
作りう三代実録より

山遠よ月日の宮ありむ〳〵はうけ
よりきるもとそ東院山あるよ天平宝
字八年藤原豊成の卿の創の東院の東堂同
四年恵美大師遠立の西堂室亀二年建
立の地蔵堂をとく浴果て師の

霊鷲 弁才天

霊鷲 弁才天は仏仁寿中よ仏法大師天川の弟子
天よ糸縛して南因堂建立式の乃り給ひ〳〵

生泉乃宮賛辯財天弾〻給て絶勧請給ふ
宮ありし山時南都より七辯財天絶勧請ちゝ也
そ乃やしろども所〻に清〻あり勧請の時乃
供物よ餅飯をそなへけゝ七ヶ日法施をそなへ
まつりもち乃後乃町とぞ名付る餅飯殿町縁起
山ゆりより吒天の宮福ゆり乃内裏乃
内やしろあり三重塔又般若波羅密乃五
字陀表示をもて石の聖天宮
一言主社 俗聖天宮と云
真福寺乃坤乃隅よりこゝに清〻て一言主乃
神ゆり社乃おゝ木憑樹あり〻ゞ平家南都を
焼ける時乃余煙山木の宛よりてゆり顕ゆの
ゆり〻に水をそゝげども消ぬよゆゆの家ゆ

七十余日捉ゆゆ清盛入道浄海公熱病よ
かり給ひし時木乃穴より猫火ゆ〻ゞ浄海公命
をゆり給ひし時ゆ捉ゆ清盛ゆり後投棄
ちぶりぬ猫ハ人あやし紀年不ぞ内ひきゆ也 盛衰記
年経て後ゆ清ける也 南世代その木をそ也
▲第一乃窟上ハ人王五十七代陽成天皇元慶二
年堂宇僧房焼失 類聚国史 毒龍寺
六十八代後一条の院万寿四年八月廿三日真福
寺の塔を立 野府十一月廿日実白方大臣頼通
公供養あり 帝王編年記
建立ゆや立〻ぞ重てあゝ給ふべし
▲第二乃窟上ハ人王七十代後冷泉院永承元
年十二月二十四日法堂焼失山時仏像ゆり

をなやませ給ひけるにあまりて給ふ 朝野群載 御
門にいらせ給ふ事はじめて勅使をもて聖
武天皇陵并に山陵のよしをつげさせ給ふ其
みことのり乃詞ハ聖武天皇乃陵乃おもてにあり
扨永萬二年柱立棟上 朝野群載 同三年三月供
養あり此时宇治殿
按ずるに海のちかひハさまで三蔵心をくみし君が
意ハ弘誓深如海乃心あり願海の初ざはおもね
どもいたづく智源寺にくさくりとあしみと
うるぞよめり 真義抄

▲第三乃災上ハ後冷泉院康平三年五月四日廻
廊僧坊南大門焼失同御宇再興あり治暦
元年二月二十五日供養 帝王編年

▲第四乃災上ハ人王七十三代堀河院寛治元年
二月東金堂焼失 帝王編年
▲第五乃災上ハ寛治元年より九年を経て堀
河院永長元年九月廿五日金堂焼失此时仏
乃眉間乃玉中乃釈迦乃小仏厨乃中より飛
出御しまして其のあたりより仏像飛出て沈
みたりしを仏師定朝弟子して寺家の
おりひそかに蔵殿をそく犯るよしを 帝王編年 抄
眉間乃水精玉をとつてかへり給ひ犯侵と
ま左右の後より讃しなるよ釈迦三尊乃形
像をうつしこれより後ひ犯とあり 歳裏记 人王七
十六代近衛院康治三年五月四日金堂棟上
帝王編年 再興あり

▲第六乃実上八人王八十代高倉院治承四年
十二月廿八日平家乃誅戮よりて伽藍一宇
もこのこりぬ一時乃ちりとなりぬ清涼院八清水の
学窓大聖文殊乃霊鷹あり一条院八定照僧都
乃聖徳弘真松房乃松室ありびよ真静僧都
の真多院大集院松陽院東北院桑志院五
大院傳法院真言国成院一言主の社辨財天
乃宮殿惣宮仏寺社等廃壊と成り（記裏人）
王八十二代後鳥羽の院建久五年五月廿二日東真
乃信養あり

▲第七の実上八人王九十代後宇多院建治三
年七月廿六日雷火よりてちりとなりぬ同年
八月朔日廻禄実検乃勅使八坂大夫經長

（帝王編年）は年春宮法皇御八月と国元
を奥編寺火乃事よりてのびさせ給ひく
十二月十九日ゆるせ給ひきる（増鏡）同御宇
弘安二年二月棟上ありしも多後遠安
遅くせしに同九年十月廿七日春日乃
神殿奥編るよう法事ありしかの
よ玉ありとも又人王九十一代伏見院正
應四年正月三日院乃御所常盤井殿より
章ありぬ給ひあんと国大臣ら下侍乃ものの
ひ法ありざりけるが春日乃神乃金堂より
法りかまたより国元うバ行章乃法もも
うれもでよ同廿日神木本津川を度ぬ
もくて遅くの事あるがらようりとへ中よ

とゝ志て申げるぐめらまをるぐに廿三日
よ神木本郷より出座海ゝ紀ありけ
きぐ廿七日よ郷ハ神木乃事よりて給ふ兵藤氏乃公
卿ハ神木乃事よりて僧事をゝ行さりけ
卍を後正安二年九月十九日借養乃日時を
ぢぐめ同十一月廿一日廿一日無畏乃借養行さげ
きゝり 帝王編年

▲養八乃奥上八人王九十五代後醍醐の天皇嘉暦
二年乃春南都大乗院師房方乃大衆と確
執の事ありて食物ハ絶ぬ金堂南
圓堂西金堂等乃餘殃とぞゝりを 太平記
王百一代後ハ松院應永六年三月十一日公方
康國院義滿公乃法建立時ハ佛師之藤



山とぞ関ゝ嘉暦二年より延寶七年迄九二
百八十年ゝ

▲法相宗伝来ハ玄昉僧正ハ朝ゝを真福
寺よりゝ入給ふ神皇正統記あり

▲仁明天皇寶算乃賀嘉祥二年三月朔日
真福寺の法師ゝ天皇乃四十よみくゝ給給
ぬと聞ゝ給ふ紀聖像ハ飛ゝ給給
明壽命陀羅尼經廿巻をゝ作ゝ給給ず
うさゝりて四万八十巻よりゝ書る更よ天人
茶をひろハ給ハ天女ゝ乃給ふ
ゝ事あゝ天衣ひるゝて作ゝ給
作ゝ給ゝ乃ゝ漂ゝ乃雪濃よ
のぼりて長生ゝ乃ゝ芳野の天女上天よ

更ひらきて又度神殿へしてはりぬるうち
なをこれをうつしまをしたてまつり其時乃歌
日のかや乃や海中の西八宮玉乃海さまとぞ
ゝよはたらへゝまつる神ゝにはたらへゝまつる
はたらへゝまつる事乃事はまをすゝ乃事はこゝ
ぬ堂ゝうれしと祭よみへして神事まつり
ぬゝまつれりと續日本後紀よあり

奥福寺之事

中院の屋

中院の屋よ春日相傳乃舍利まを佛像あり
只藥山乃きゝを海乃池水乃源ゝさゝ紀とよ
ぞ乃ゝ作乃

一乗院ハ西乃ゝくよあり寶倉あり

一乗院

一乗院ハ寶鐘僧都乃造ゝとゝや山僧都之藤
氏ゝやあれ人なり仁數乃菴室よやみてゝ法相
宗海をび寛空の眷菴よりてハ密灌乃けい
ぎく東寺奥福寺乃長勢宗源ゝり門徒よ
ゝり源ふゝゝ屍更よやく事をゝびきゝゝ拔
骨とゝやゝを法華を誦ゝ一切をきゝひゝをつ
ゆよ永觀元年三月廿一日定印端坐ゝてをハ
ゝをとゝ紀遺言よ海ゝ也墓よ法さゝゝよ誦經
乃声鈴乃音をゝどゝえはりをる山僧都幼名
のむゝ一指を女よ乳よ吸ゝく事あり今文殊乃
よ山一指清淨なゝぬ事よはゝゝとて拔刀と
なゝ三寶よ供養ゝ懺悔をきけるゝ

又渡乃わたりに舟よのほとりはあらしにあひて
うきしまで吹くく途をうしなふ所に十羅刹女
十人乃童子と化して舟をそなへ給ひ
給ひ紀友雄よりさやうにうくんぞくの人
ぞくの舟かくるやうにとまりぬ紀人まて海をは
一とせ山院の庭乃橘をのぼりうゑ給ひ八大
仏頂の咒をとなへ給へくまなく更に枝葉をぞり
うりをり 釈書 道院と大菓院をうつしくり乃寺
勢職まそおりて海に抑真福寺に勢職は
寶字元年慈部僧都よりて海にまて 釈書 後篇
世を終ぬ

松室一菓院乃うとり
松室貞松房八仲箕巳講乃住給ひしをりに

仲箕もゆきもの乃ものの人ともはぐくみ給ひ真福
寺の水の門より六七歳乃童子まてあそびわらはし
給ひ乃うたをのよあらぬをとして定慧法しの
そぐそらまくに人ありかをを身をとりぞきる人よ
やあり名僧院をうつ給ふまバ鮮して他よりぞ
非摩舎院寺あまどもかをひ給ふ年三度あり
應和三年宮中の論義よりあり安和二年
貞観の御乃年中ありて殺若心経を講ぞうまて
よハ千ゑ千眼乃像あらうまを給ふその講をハ
まて若上よのぞりて殺よりく給ひしもの
又恵恩寺山よ入くく更よ給ひし兵革鞋を
のこ給しをうまくくともあり 釈書

八重橘

観音院乃うしろ集會堂乃あるよ東回堂
乃法そのそとりか八重ゐらるごりぞり
よのこりてありり
八重桜八東回堂乃まへよりあり 沙石集 又東金堂よ
ゐへうり 感衰記 ぞうぞうしく書きてうり八重桜とかふ
一本よりうぞうしりをるふこそ又高田の義綱八
八重桜八ゐうれうやあよのをありとぞうをるさ
もこそありをめ
一條院の御時ゐうれやあ乃八重桜を人
のうて海ゐりをる紙ゐよ御りうれば
そ乃うれをそ海ゐりて哥よあとおは
詞花集 をうをきうをきばうよある
いゆへ乃ゐうれをやあの八重桜ゐふ九重よあ乃ゐ 伊勢大輔

建久六年東大寺供養よ行幸ゐ時奥羽
寺乃八重桜ゐゐりありをるをんく校よ
ゐび御り
新古今 高ゐやをゐ乃ゐをえてそ花桜ゐ高葉に乃世ゐり 僧人不知
又上東門院とて居おゐ海ゐけゐ八重さくら紙
みやあよあゐをきうば大元ゐとびんゐた
とん乃ゐうハともあを一桜紙ゐりて八えうそ海
ゐうをゐ海ゐんゐゐくあゐのゐ乃ゐわさゐ
どもありとうや女院くをきあゐ絵ひく
斎良法師ハ心ゐ紀りのをうそあゐひが海とた
久ゐうとて桜ハあうさをりりうとに御賀園
余野の房をよをを絵ひくそれより花のさり
七日のあひぐ宿を海をを絵ひをる

くありそれハ余瀬をあらためて花園の瀬
とは名づけそれ（沙石集）石山寺ハ高頂ゆゑ伽
又春日若宮乃神ハ猟師とかりあるいハ童梯を
作ればとめくをのづせさいのぞうへきる事絶
て久者をとよ作りうきぶかとめでこれ拙
ゆゑ大関よ関しめあぎらき
て手梯をそめ作きこ名ありてきりあぐらい
ゆゑ名めぐりやありへきもむ
八童梯ハ九重よう作きて直死拙乃書ぞさび
とゆんよみくく花めぞ清びる大関めを山鉄を
めで作せ給ひて作らハ名ぐらへし給ひ
きるの神民ハ優よやう死人めて撰集のあ
つけるよ

和泉の浦よ流つけ名ぐら濱命者人まつれ名者民の
やゆよみくくえらびまは入りそれなり濱命者の神
をとは人ひとり

花林院

花林院の西よ花林院乃流あり中節とかき
花林院ハ別当乃永因僧正乃すを給ひ事あり
僧正優よやう死人めて引くぶの時を浮せ
金剛殿よめ作ら少きべ引くぶ拙ゆゑ心徳を
ゆゑ少死拙御てそ拙者の僧正くハ人それ給ひを
う作業四年平家の美よ仏像逆奏のうち
とこらのぶくを給ひ拙乃年ぶくをあるあさ海
とてもひとらこらぶれきるりや海ひぢきて
海よをらき一引 平家物 叙書め奏よ無稽な

永縁とかゝあり永四とは別人なり永縁八人
王七十五代崇徳天皇乃時代の人永四八十
代高倉院の時宇の人乃やうよもんゐて作り
御供金業和歌集よ右の歌をのせて撰價正
永縁とあり阿乃人けぐうにさう彩べし

勸修坊

山野を巡て勸修坊ハ周防得業聖傳乃住坊なり文治
三年源義經卿檀のようにありて逐電の時
ちゞ乃ぶ給ひし坊なり東鑑しるし
坊乃ぶりよ失乃事作りよ源の義經業経
そあ使をたらハ作りまるその時ちゞ坊よ今よ
ありやそ

菩提院 呼大御堂

奥福寺南大門之東よ鐘楼あり
本尊ハ无量壽佛右方ハ厨子ハ生身乃菩薩
児観音あり康野園梵福寺乃縁起曰一条院
乃時宇よ朝倹上人やゝ小菩提院よありて
修學他事ハ多くあるとも名利よ離れ
乃道をたゝ行ゲ檀子生現行現行
堂種子と云論文よ相ゞ乃ぶて離乃心作
ありとも牧服器修業乃ゝ心乃まゝ
乃事作ゝ乃ぶて毎月物部寺よ詣でゝ
事作ゝ乃ぶくよ三ゝ乃作源ゝり寛仏四年十二
月晦日よ詣でゝ我道心開發と祈る事ゝ乃ぶ
菩薩乃本誓ゝ乃ぶ彩ゝ乃ぶ又悲願

もむかうべしと悠然又むかしの雅のは喜
撫を頼べ紀秋よ豊の撫心紙ちぢげ給へを法ゐ
志後衣あけぬまてば山河紙志のびくへりよ
ゐう乃京乃辰巳廉野園乃松陰ゆて目ハ
ゐまこうりおりひあへねよ十二三だうりのまうた
乃まりて我よ志うて紀をのゐ上人秋紙長
ミ給へとゐげ〳〵ゐて〳〵あゐまこりりゐさとよ
ゐもゐひ〳〵寺よゐうり紀を後上人よ法へ
まり幸ゐゐべくゐべくて古を世とゐ
長和二年三月十八日よ童子今をゐく狂あ
るべしとも見〳〵げば長師悲ゐ〳〵ゐうんそ
ゐゐ〳〵ゐまこ我死ゐまうん後檀よあさめて初
遺まり〳〵廉野園の松乃上よゐを紀七日と添て

ひゐ紀給へべしを給ひて息絶ぬ由のどくゆて
とゐり捨へりぬよ人心よ知ゐよ法ゐ〳〵乃彩
ぢゆをゐゐへ法世給ゐて紀ゐ紀月紀乃世給ゐ
そゐうゆ〳〵ゐまこと長谷寺よ法うでく養蘆よ
ゐちゐく〳〵会浦してゐまりきる美よゐう乃
童子乃檀乃うちゐちゐり観世音乃法正弥や
ゐりて乃まりて正面の御戸乃上よゐ〳〵乃と
ゐげ〳〵て法ゐうりゐまゐゐ僧乃ひきゐ八
法たとせゐ給へる法正弥乃怠弥〳〵てゐ
まり給ふぢやとゐひあへる紀月まこ美よゐん
法正弥まてぢおりて法け紀上人ゐ〳〵ありやゐ〳〵ゐ
〳〵法よへりぬあり日を七日よゐりぬまこば
檀紀ひゐ紀ゐまよ金文生身乃十一面観世

音海紀伊菩薩乃利生方便とぞ云ふ

[illegible]せ給ひ世俗の児観音堂より人物ハ

都辛乃行者うりゝ山後ハ観世音堂念願

て死期ハ[illegible]源正念よりうりとうまけ

れ其後補陀洛山より生むとて門弟子どもう

けげ給ひきるとうや

## 康野苑縁起

大棄院

僧人関大棄院ハ場川院乃西寛治元年二

月より造立ありし今乃西ハ元真寺ハ別當乃住坊

うり孫定院の孫ハ乃大棄院の弟ハ

真福寺院乃門弟雲院とゝ僧坊乃うり

うり本尊ハ隆孫大僧都やゝ[illegible]

政兼朝臣乃長男ありし康和二年七月十四日より遷

化ありて大安寺人葬記そ乃所ハ大安寺観音堂

乃ゝのくるよ松乃一本生うり塚色あり

## 猿沢池

真福寺乃南のうりよりハ池乃西より

宋女乃宮東うけ柳ぐゝあり

楊貴妃乃楊ありむう真福寺より玄宗

法師ゝ乃ありてあひうけうれば

とて楊貴妃とうは名ぐをけるやう

猿沢乃池ハ天竺の猴猴池とうたうこの名

ありとぞ池の西ゝ乃方乃松軒坊うり猴猴乃

形像あり弘法大師乃作あり俗説云ふ

あり抑天竺毗舎利国より猴猴池ありその

池乃きたかね西よちろく乃猿ありて如来乃
鉢をもちて樹上よのぼり蜜をとりて池の遠
かね南よむかひまたる猿ありて佛よ蜜をさ
さげ奉りし所也池乃西北よ獼猴乃形像あり
西域記 かの獼猴池のほとりおいて目蓮尊者無所
有所定よ坐をきまりて象乃かう声猿乃さ
いねるも声など耳よ入りて定れやきたれ
唯識述記 なれ我くむかしなかれみだりよ流る
かねめありきりはるちかき声をきよるよ
てんくよびひ敵上人なかもよびひたまかぜあ
いげりきりそのあかね心をみかぜをとりきる
くめでて紀持よなんおりひなりけるみかぜ
めて[illegible]後文をもめけかりけまむかし

なく心うせおほひより暑世よ梅雨が記し
をまはよるみかるよのぞて猿沢乃池よ身を
なげてぎりて奉げれとも法門を感き
しめさけりけれ紀年乃はぬでありて人
乃そうしをまはは聞しめして彼かせいちあ
はきがり給ひて池乃ほとりよ葬みな給し
給てんてよ舟よ歯世給ふ

柿本人丸

よ紀もこが稀されし髪猿沢乃池の玉藻とみるぞかなしき

やをよめる時よ[illegible]やと

猿沢乃池もは何れ紀を子が玉藻かづかば水ぞひなん

やとよみ給ひより後は池よきうせはせ絵てなん
くさらをおつ歯しけるやとなん

玉計集
見わたせハ義とも見んよ猪沢乃ゆゑ世よそ猪名の恋

轟橋

東大寺福田寺の中間押明乃門の南乃方り此橋乃名ゆゑ雲井坂

奈良八景
ら渡る人めも深ぎ行駒の跡こそ多き轟の橋 冬宗

あゝ見ぬ梅り春りまんてゆゑ〳〵よ見るゆゑ

みゆ乃山れ雲ぐ乃れ乃ゝ雲井坂 澄月 歌枕

同

村雨れ晴間よ雲井坂三笠れ山れ紅ち先為重

山城国のゆよ大和国ハ南よりゆ小坂ゆ

ゆ而去国乃陰ゆり大和国乃名ゆゑ

大和国

大和国ハ古ぐ日本国乃地名ゆてゆゑ

へば大和一ケ国乃名ゆり 釈日本紀

日本国と ゆふハ大巳貴乃尊 魂奇魂日本国三

法山よすみ給ふと宣ひ記ゆゑ

家ゆて三輪乃神とあゞめ

邪麻止ゆゑ或ハ山よ倭止乃人ゆり或

ハ倭ゆ作ちわゝて山ぐ上濃ゆゑ山を

倭家ゆてゆゑ乃弘法ゆり

釈日本紀曰 弘仁私記序

山戸ゆゑ乃ゆ山ゆより而ゆて倭人ゆゑ

釈日本紀曰 延喜開題記

山跡ゆゑ乃ゆ山よ乃ぐ乃人弘ゆゑ人

日本紀

釈日本紀曰延喜開題記

大日本豊秋津洲と名ふる事陰陽乃二神始め
し海をとりみ給ふ乃時まづ淡路洲をあ
ら出し給ふ神代と云へども猶此の国
中に未給ふ故り大八洲の名ふ
国をとなへ乃心なり釈日本紀
蜻蛉日本と名ふ饒速日命あまの磐船よ
りして此国に降り給ひし時そらみつ山郷と名ふ
秋津洲倭也と云へり宮ばしらあり月本紀
又曰天皇山国乃名ふ神武
紀
蜻蛉乃名ふ給ひし間本縁真迹国也と云へども
日本紀
なほ猶乃名ふ宮ばしらあり山名あり

秋津洲乃国と名ふ乃人秋国の名と
倭国也と云ふ日流よりして
ひ行よ秋国やとあらしくば秋のつ光ら
倭国と云へり也あり墓疏
天御虚空豊秋津洲と名ふ旧事紀
浦安国と名ふ
細戈千足国と名ふ
磯輪上秀真国と名ふ
乃名をさせ給ひし名あり釈日本紀
王墉国と名ふ
也あり日本紀 旧流日王墉ハ倭也三輪の神すを
給ふ故あり
日本国と名ふ也陰陽二神つゞめて日乃神を

うを給ふ事ありき日本紀弘仁私記
序に云く日本國は大唐より東にして万象
日東に居て技業の所なるは故に云ふなり
又は國日邊に近しあり故に名あり又倭國は名
雅なりと云ふ事なりてあらくあく日本と云ふ
ことなり蹴鞠
耶馬臺國とは云ふ倭乃音をとりもちゆることと
云ふなり釈日紀
大縣の郡とは養老四年に勅あり拾芥抄
大養徳國とは天平九年十二月に
勅あり続日本紀又は大倭國と
云ふなり又あらくは大和國と云ふなり拾芥抄
一國の名とは別て日本國乃地名とあるなり

神武天皇は國乃中に八重に
垣を給ひし時に初て天皇と申なり紀に皇后又
橿原の宮に皇太子とは申る兵帝都乃開基なるが
如くあり釈日本紀又世に
國とは云ふなり大和國は言霊乃海さ國なるが
ゆえに云ふなり神代紀に
日本後紀に云ふ言霊は調なり無名抄大和國
は幾内乃國の中一なり
云ふ給ひて後に仁明天皇三年に勅をくだし給ひ
て山城國と中一とせらるる給ひなり続日本後紀
郡は十の郡 添上 添下 平群 廣瀬
菅原 宇智 葛上 城上
山辺 恐海 高市 宇陀 葛下 城下 十市 延喜式

田乃数ハ一万七千九百八町九段百八十歩 倭名類聚

倭路

倭路ハ聖徳太子御幸世田山より山田乃大道
城法隆寺勅人馬乃法隆寺をやしろ給りと
なり上津道ハ東よりあり長谷乃大道中津
道ハ芳野乃通路下津道ハ今乃西乃大道

玉林抄

万葉

拾玉

なにはより難波乃ぬまを過て倭路乃ぬまに出る
なにはより難波乃ぬまを過て倭路やいでて
中津道ハ紀ノ国

草根抄

紀路やすぐるなかつ道ハ
奈良

平城 平城 那羅 諾楽 寧楽 乃楽 楢とも

なり 万葉集日本紀釈書 文奈良ハ崇神天皇十年九月
武埴安彦と妻乃吾田媛ハ国家ヲ傾ケ悔ヲ
ハ大阪より山ヲさかのぼ
ハ大阪より山ヲさかのぼ
門五十狭芹彦命紀ノ国ヲ
と大阪ヨリ武内宿禰
ヲ大和と和泉国
ヲ大和と和泉国
ヲ輪韓川 又名いとこ川 又泉川俗云木津川
ヲ敵の軍ヲ
ヲ忌竟 忌竟ハ青瓷
ヲ和泉乃国 ヲ和泉乃国
ヲ那羅山 ヲ那羅山
ヲ草木ヲ梅ヲ
ヲ那羅山と
ヲ忌竟ハ青瓷
ヲ瓷ハ酒器 祠林抄 棟 又青瓷

祠林抄 葉抄

[illegible]
[illegible]ハ何林樂柳より[illegible]
万葉 あをによし[illegible]ハ咲[illegible]
同 [illegible]
同 我宿の芽子咲[illegible]
玉吟集 [illegible]

著櫛笠

物類名所類字名所等添上郡平城より奈良の里なり

万葉 [illegible]
同巻十二 [illegible]衣著櫛乃山乃[illegible]
澄風哥 桃同著櫛とくゝり櫛と櫛と
和名抄 不同の仮訓一所よのせゝり或曰櫛

是正字の[illegible]則奈良山や著ハ助語字也 先達
著櫛と奈良山とちがめ[illegible]
[illegible]
幸于難波宮作歌四首乃中より
万葉 韓衣服櫛乃笠乃島 侍命 玉手師 付手好人欲得
服櫛乃島とあれハ津の国乃名所ハ
あらずやうたねとあらうかせうえ
文本 [illegible]
奈良の大路
万葉 青丹吉[illegible]
奈良坂殺義 付酒野在家
奈良坂殺義瀧乃二川乃道はざうあらば今乃
大道と云東より伊賀より乃通路ありと也

らまや酒野左家をはじめとしてむかし平家の
所とせめぬべしたゝ国へあり〜往よ大石を物と
西ねはあり光泰長坂般若寺乃三門乃道う
り城ゝり城樹と西へてまらこう治承寿永
十二月廿八日乃事なりしを軍所よ入くく
所なりられば大将軍平重衡乃例乃大こいまり
こと知をうきゝ往よ酒野左家よ出をける
ら城でやれらはけり　威裏記

般若寺　寺領三拾石

般若寺ハ聖武天皇乃御建立勅書乃大般若
経城地庭よ納めさせそのうへよ十三重乃塔城
こて給ひしうり般若寺ハ観賢僧正乃開基て釈
紀ども和刊般若寺ハ観賢僧正乃開基て釈



書よ乃こうり本尊乃文殊大士ハ悪性律師依へよ
衣縁をもとゝめむとて文乃文殊菩薩を
ぬこうり山寺よりもん給ひし　釈書

▲開山観賢僧正ハ秦氏ゆてさねな文乃西の人し
聖寶乃法弟乃こうり延喜廿一年勅定よりて
仏法大師乃宣旨乃こと乃ひうよ出髪なること
ひうよ出髪なること　釈書
そうなりて又出門ゆうり西へ出ける
乃法衣　威裏記　とめうへさせ給ひしうり
十九年醍醐寺乃座こうり出職乃ちゆめし
延長三年僧正よりこうりその年乃六月十一日よ
とうりをとる　釈書

▲実上ハ治承四年辛の重衡ハ乃長史よりて

煙と多り之後文永年中は西大寺叡尊正善薩
乃来臨多り年弾て延徳二年奥上して建義
楼門のを沙しゝ文殊大士建義よ中へく
年久しく弾くり今乃堂ハ寛文年中建義
▲むしハ真言ゝりゲ文永年ゝりゝ
ゝり寶物ゝ大塔乃寶物ゝ
あやゝ紀伊ハちどのゝれさせ給ひ大殺義
經同楼ありゝくハ太平記よあり
▲山寺乃山十町乃ゝち本堂乃寺建築
乃寶ト有り奥觀立年九月廿六日 三代実録
是ゝり南は三月乃辛都婆あり
三間辛都婆
辛野乃三間辛都婆あり 咸裏記
ゝ石乃

ゝらと左右よりて其頂上の石乃蓋あり
ゝり俗は笠辛都婆ゝ称ゝ
行基帯乃文右は此来温泉の文殊ゝりつを
ゝり石剛寺の勸樂乃文殊ゝりつを
寺乃実範乃ゝりつを中川

悪左衛墓

あよ此ひ佐ゝ入て今ハ大道ゝり十町わきり
ひゝ右ひきの文ハの左衛乃墓のあゝ
ゝ此ハ高良ハの名びきの
ゝ今乃大道ハ
宮乃ゝりハ殺若御ゝりやはゝに
悪左衛頼長ハゝやあ乃ゝくさにゝれ矢よあゝり
後ひゝく大和路よゝり給ひゝが保元年七月十
四日市ゝ世七めてうをは世給ひゝばあよ藤

しうり紀同廿五日実否乃実験して死うづしを
ありあり けがそのあ八橋上の郡川上村殺若野の
又三縁ありて大道より東より入事一町あまり 玄
同律師実験得業乃墓乃れひごゆうめ法松
乃ちちく傷元拘偏よりしうりを後治兼二年
中宮亦産乃法乃りよ大政大臣一位を遣り
給ひうり 平家物語 延宝七年辰元五百廿四年う

草根

奈良坂

新ぶ良坂乃ばは名りあり坂やさしよ柳乃海の三月正徴

奈良坂癩人

竹乃はりうやありうむ癩人乃住宅と
あるり
むりしはれるあれで良海やとうまして行歩をうるぶれば

袖おひもるるいぶ日紀沖法とふ人ども拘をこ八
ぶりけう癩人ありそのれ悪性律師を西大寺
ぶぞ住おりうはかれ癩人紀見給ひくを
あれぐり暁ぶにあうり坂乃ふりよふりて癩
人紀うろよおひまりう市中よ人を紀書ぬ
ば又おひくうれがいりりよをりうしー風あり癩
暑ようをおうりあり癩人流浪の時ちうひあり
我うあうぶ又山世界ようあまて師よふへて
家恩を報ぶ事ん癩よ一癩を治して
しをんとふひくぞ師をりきるその後悪性律
師よ法人一人の中よあるぶちよふうまう
紀をものありうに一癩者の後
聚とぞふへる悪性律師乃住宅の伽藍八丁

三百塔婆二十基大菩薩一十四菩薩法華経一百八十九百嘉元元年七月十二日とり紙
とる年八十七 釈書

佐保川

今新立家町の石橋是なり水上は春日
山より西を眉間寺の南の梅ノ木
谷を経て西へ流れ眉間寺乃山号を佐保山と
云ふ

万葉

佐保過てくもりなく月の同じ帰ハ妹とありねばめでぬ長屋王

同

梅柳過てくもりなく佐保乃川の水とゆ春の来ぬるを見るも

待賢門院堀川

あさくらゝる高瀬川

覚雅僧都百首

佐保川乃源よりくゝる水ハ

後京極百番歌合

水上よりこのかけ紀さ保川の出る所ハ



佐保殿 ハ太宰府

佐大臣長屋王乃佐保の宅也

万葉

紀遠嬢くゝる霜ハ百代迄よ 太上天皇

同

あをによしなる紀ハ天皇

栄紀拘ぐりき東野乃奏よりハ乃ぬかるのゝ

とゝの今ハ三位中将とそ

是さ海ゆり左乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ

ぬ乃中納言よりの春日まつりの上和せ

ぬ乃世絶ふ 畧こゝ乃ぬ

ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ

ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ

ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ

ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ

梨子原

俗よ内侍原町とゝかゝる所なりやはらの西云

ありけるハ二条乃大路乃南よりあり

梨子原をもて近衛府乃領地なり春日祭の

勅使まゐり山城国淀乃渡豆御牧より一夜とゝ

まる中九日ありて乃梨子原よりたちまち裝束をして

西ゝくよりそなへ山陵寺乃ゆゑびよりとゝ

て殿乃座よりたゝ神おろ乃縄或ことをうけ

つゝて縄をとゝ引てをるらて梨子原

よりたちてゝをもまぐら酔あそび給ふてあり江家次第

又東大寺八幡菩薩を宮南乃梨子原乃宮よ

新宮をたゝりてうたゝ

出而あり入

文本

春ばるり春日乃拍子乃音ハ

同

あるいそもゝ時ハ

卒川坂本陵

林乃山路韓国乃社乃奥れる念仏寺乃境

内よりあり古老乃云へり韓国乃社

八園韓神是為舞楽あり社説

古不乃社ゝ

卒川坂本陵ハ和名抄

九代開化天皇乃陵なり市字六十年四月九日

よ落雷あり後ハ市

年乃十月春日乃卒川坂本陵よ葬

日本紀

延喜七年乙丑

卒川宮

後人不知

正三位

延喜式

人王

古事紀曰六十三歳

その

乃千百十五歳

乃千七百七十六年

辛川宮ハ開化天皇春日地より都をうつし給ひて辛川宮とゝ(日本紀)

古老伝ニ云く此辛川宮の跡ハ今式内守町にして辛川乃社あり俗よ子守乃宮とゝ云ふ社なりしよ辛川乃ゆゑなれあり

辛川社

辛川の社ハ春日乃社やしろゝ宮ゝ引のけく

いさゝゝとよそんぞゝ乃神ゝおゝ坐ゝ天下治ゝ世ぞゝ乃ゝ

延喜式撰集物

辛川よ入ゝ給ひ大神御子神乃社三座

一ハ開化天皇ゝ二ハ子守神 第三ハ住吉の神なりゝ社二座巽乃方ハ春日大明神押乃方ハ住吉大明神なり尚社も正一位なり



川ゆもてらや 或傳

▲三枝祭ハ辛川乃祭とも云ふ春日祭ゝ日とゝ

とゝかゝるゝし神祇令よのもり三枝の祭と称

るべくハ四月まてあるべし 根源 今義解よ孟夏

乃祭よ入ゝ三枝の祭ハ辛川祭とゝあり延

喜式よ三枝祭四月ゝあり是三枝祭とゝハ長三

枝と酒蹲よりぼる酒へよ云名あり 今義解 藤原

南家乃ハ住ハ辛川の社も古大名是乃建立

と伝ゝ是ゝ乃ゝ書ハ此故ハ今とゝ書ハ

渓海云乃云ゝ云ゝ類老辛中よ奏流あり

是云の天長ゝ渓海云乃曾編ゝ既今よ辛川の

社と伝ゝれバ是云乃ゝ建立ゝ云ゝ

ゝゝざるゝや類老云ゝあゝゝゝやあゝけ神

社し是ぶ乃森奥し給ひけるを遠ぶとしやもん
いと見ばけるに　石手根源　三枚さまくさともさい
くさともくさともあり此祭礼果る時代を
志らず
白川院七百首
えぬりこいそや海みんとくはさ川乃神も家井になき沢田迴　資季

率川阿波神社

此社ハ率川大神御子神社とは別にして神名
帳にも別家よのせてまてり以後是乃所を志ら
ず仁寿二年十一月大和国率川阿波神に
従五位下を授け給ひしよし文徳実録に見
えたりくはしてあれうにせう記べし

餅飯殿町　付大宿所

りわ中度町も旧名を貴島郷といふ是ハあゆ乃
みくの此守に国司和気利実つ五月一日に始て
蔵乃法を修しきしより此名あり又後窟乃
弁才天を勧請の時餅飯乃供を奉りしより
餅飯殿乃名ありといふ窟乃弁財天の本
にありけるは相むかし役行者大峯乃道を開き
給ひしより後中絶く藤葛通路を埋みけれバ聖宝
僧正入峯乃路ねふるとぬしくあげ紀定にひらかん
しおぼし給ひしよ当町乃從七人僧正乃厚
恩ありとて供奉せり従よ二度ひらき文録にに
至当山とは此へりそれより相従で多くはし此町の
人々山上乃峯入今に絶ず　餅飯殿町縁起　吉野より峯
までその旅籠乃事ていふ旧例によとぞりし八
百歳乃年ハ経れども聖宝僧正乃威風絶

やうぢ叔大宿所とぞいふあり遍照院と号も春日
春日の祭祀乃勢祀乃勢祀をもつる所なりこれは
春宮参礼の所なりあるべし

悲田院

行僧乃こゝらにはもとより乃悲田院ハ孫文
てく中法ゝらは山院建立ゝ田院乃絵は
ぢうに志ゝうもとゝり釈書よ奥福寺ゝ
内よゝてゝ志ゝ乃ゝゝり今山所
奥福ゝりハゝ所ゝの南ゆぞ作れ
悲田院乃本ゝハ観音菩薩ゆてゝゝまぞ
作ゝ衣乃法ゝをひぢより薬師乃立像よ作
里衣ハ法ひぢより阿弥陀仏乃立像よ作
まりむゝ悲田院乃仏ゝぞ作りまゝるゆ

行僧乃こゝ志ゝ乃元正天皇養老七年施
薬悲田乃二院と奥福寺よゝてゝられし釈書

誕生堂 鳴川町

中将局乃誕生乃所ゝ父ハ藤原朝臣豊成
山豊成の石塔ハ南都ゝ所とゝふ所ゝあり
ゝ物りてけゝ記えゝゝ塔よありゝ志ハ世
よゝ志ゝひあゝこのゝふゝひて人あゝぐ
志て入ゝゝいゝとゝ世ゝ石塔ゝ志ゝびゝん
とゝゝゝに連歌師ゝあゝとゝゆ物ゝ
志ゝゝゝ志ゝあゝゝゝゝゝ
引のゝを後ゝ又ゝ乃弁ゝ白絵ゝ
ゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ありゝゝゝゝ年ゝ
ゝゝゝゝゝゝ鳴川乃大念

佛寺よりたてまつりと或人つたへをるなり
開拓ぐうして紀伊国
元興寺 寺領五拾石前代真言宗
元興寺はもと人累て五重の塔一基大日如来
ならびに又堂一宇観音菩薩をまつり山観音
の像は長谷の観音をうつし霊木の中二の
ぞれて彫刻ぜしなり長谷よりでぬるは
まづ山観音よりでぬるの事なるべし
ならぬよ伝ふ此吹聚紀 建前
高市郡飛鳥の地よりて給ひ日本紀 その
四門の額は南は元興寺北は法満寺東は
飛鳥寺西は法興寺とつけ給ひ又建興
寺又建通寺とも云へり 玉林抄 出沢記紀 宝後人 玉四

十三代元明天皇和銅三年高市郡藤原の
宮より都ぞ移りよりて日本門飛鳥寺
より行幸あり給ひて先仏像法元興寺の場あり
併の寺奈良よりうつし給ひと勅言おり法
し紀三代格 ふるくは帝王編年よりあり四十四代元正
天皇霊亀二年五月元興寺代なりよりうつし
たる新の六条四坊よりうつる 續日本紀 又同注宇類抄
二年八月法興寺を新京よりうつし給ふ
より 續日本紀 霊亀二年ふるの養老二年迄八年
に二三年を経る霊亀二年より元興寺とて
あて養老二年より成就するもくさもてあり
め給へし 元興寺法興寺異名同寺 和高市郡元興寺
八旧都よりありて本元興寺と云ふ新京なり

よハあらうにそく彩元興寺とゝのへり帝王編年佛像ゐどは掌ばうにさまつとゝや玉林抄靈亀二年より
又延賓七年迄九百六十四年う

極樂坊

元興寺乃ゐよありむ〳〵ハ元興寺のる
中よて作りゞいぢれ乃年ゝや西大寺ゝ
法流よりうり

極樂坊ハ智光法師乃ありゝ居給ひ一ゐ更智
光法師ハ河内國乃人家書或ハ大和國乃人とも
油中抄むうゝや海やのゐよ猛者ありゝり家よハ山を
法紀池をりいまうにさりをり門守乃姫乃よ
ありをるゝハの麻猛田九と山ひゝくありをり池
乃ゐりよいうりて行法をけるゞ猛者乃いつを



姫君いでくあそびをるをゝりはゝゝハ猛
をゐ紀心つ紀法く病よありてを年とゐくゐを
又をれバ姫あやしをゝ姫ゝよあるゞちよとゝけ
きバゝゝハ法ゝ法ゝ彩よをべくある紀
年ゐゝねを我ゐ元をゐん年をゐげくゐに
姫を又病ゐ姫ねを時よゐの家乃女房ゝ姫の
屋ゝよ立ゝりをるよ二人乃ものやをゝをを
んてあやしをいたくとゝよ姫乃ゐゝをを
海ひをてをあゝを海ゝゝ乃事の作りをゐひ
ゐゞくよりてゐやこをんとをるゐりとゐ
女房ゝゝひゝくゝゝを姫君よゝ彩よ姫君
あれゞりてやを紀年をや病紀やめゝくゝひ
ゝをバゝゝハをゐやもゝこゐりよゐゞて

なくて拘くひるがごとくして例のごくよりぬ娘表
ゆくゆくまのびくくみるのごくよりたむよりかくさん
はは母ありふべーまうはよりあびく一二百よ
ありひりまた又いくく我父母まん事ちくー生後
ハるが事色はなせさもべ紀よ文字まうばうん
まうー学問まべー童又学問して拘見あるん紀
よりぬ又ゆふ志のびくよんまうはこるり
清師よりるべー則ありぬ又ゆふそのこるれ
清師のちぢうんあやー心運大殺表ごるむ
ありいのりるくまるやうあもりるさんとふ
我まくびてよみりまた又ゆふいまう修行せよ後
躰なくまるやうまくく逝くくりるとゆふ修行
よりくりまた娘表あいまてみて藤のちるあと頂て



やうす所殺とゆふみりまりぬのりまた表て他
行ーありくりりに娘表世よりくりりよれば
そのり我国て道心とおりひんよ極ゆを称
ばりてうりとれひるまりてうをぬやみども後の
事まるに行基菩薩と導師ようけうり礼盤
よのぼりていまくあるるとるるが敬礼れぞぬ
ひーくまるあるとゆひくうねうりてこと事を
いまでとりぬやみあやーまてとひれば之者
智光ゆうりまで往生まべ紀縁ありりのくまう
我ばれよ世間よ貪着して悪道よゆんを
まうバ我方便よりてうくまあーらんしれうと
あんありまうり娘表ハ行基菩薩乃化身行基
ハ文殊ありあるるハ智光智光

とて往生しぬるこの僧是ぞ紀氏の事
ゆをあらじどんの文殊供養しきり導師して仁海僧正乃宣旨をうけたまはりて
行法をつとめ給ふ人を尊びやしたまふものなるべし
山心地あるとなんの給ふと神中物よりうく
乃ゝこゝろ
柳智光法師ハ智行そなはりやんごとなき人なり聖武天皇乃御
その時行基菩薩と法師あり智光ハ行基ハ
俗いとあはれなりこゝろ智光ハ
をりゝ智を又何ぞ
ようて我をまてさせ給ふるとかくうめきて
世をさりぬ山ふかく紀寺より我をまてけり智光
ありしあへぬよ死をりはるよ門弟ども
遺言

ありゝ程よ日ぬ程ぬ
十日とゆゆ我を藤てまいりて冥王宮乃
使我を問ゝて行基菩薩乃
と使者よとゆ使者あり
生れぬべき西しをを
宣よりてもえあげる
使者これぞ汝を入れん
よ冥王乃法おゆぞひさ
給ふ汝閻浮提日本ゆ
悪乃心あり今汝をよびてその罪を徴を則
洞極乃冥よりあげれ
ら生けり我身筋骨とをごろけぬ
よゆるさるゝとおぼして生ゆ事を

行基菩薩よ謝しなんち時行基菩薩八雲
波江乃橋をはらりかの絵ひ〜ゞ智光法師ゞ
ねて行ぬるゆ菩薩ちるにんく〜それぞと心
ゆやちゝれんをみてぞちれきり智光法師
をゝぞとをゞ〜地よゆ礼拝ちて罷とぞ謝し
ちりきるとぞ　万陀羅教ちゝ礼拝ちるゆ人よてありれ
ゞよや阿弥陀仏国の高ちゞる願得ちゝきてり

▲南方よ浄土万陀羅あり　百誓曰方一尺二寸　李朝
家物曼陀羅ハ僧よ智光　白記曰方二尺　曼陀羅とゆゆ智光
法師礼光法師とちて智行やんど光二法師
ありちり礼光法師手ちけて無言罷ぬち
をゞち絵よどちり絵ひちり智光法師法ちと
ゆひ〜ち言乃濫ハゆと罷ぬちゝて罷



ゆ是その生而法ちぞいえある海ゞとて濫
ちゆちて法事をぞいのりきる一報義を見きる
よ礼光法師乃ちにりて海見えぬるゆ
ち法きる而ハ七寶荘厳立迦乃光明と光よ
ゆべくちあちぞいちゆ而ちゞくハおゆち
ゞや礼光法師是ハ極楽世界よぞゆちり
ゆち報法幸月言語を施して観相乃所を
ちゆれゞり功徳ようりてちくめぞ記月
とゆちり伝れ智光法師ちあちゞその観
相乃ちゆ法ちゝめ絵ちとひけゞ礼
光法師ちあちゞ阿弥陀仏乃由よ得
てまちりちんといさひ行と光ひ〜ゞ
ゆの阿弥陀仏よ海見て勝法届〜掌を

あるをうくるの事こそはかなひ給まと奏〜
なりしうば佛の室〜極樂世界をうらびの莊
嚴を觀相をよとしてかんそめ〜まうば稱光
法師莊嚴うばりをこうびて世界をひろいう
でう凡夫の觀相ようをひ海やとなげ〜け
し凡佛まうば佛右の掌をひらう世給ひく小淨
土を現じ給ふを知ぐこをまると羅ばして義は
こあるよりこうありけまうば小淨土を高給せ
給まう〜あり今當時よあり（書いり〜人圓善上
人とゆよあり應永廿四年十月十四日寅よまう
で〜曼陀羅あうびよ佛舍利を拾ひ給ひそ
の事どもこうづようまう〜うば長老は曼陀羅の
屋師ハ西方極樂弥陀佛の左脇士の菩薩



觀音と泥してう凡給へうり舍利ハ佛の骨れあるよ
ハ淨土を現じ給ふ時波羅蜜生うこうびとあり
ゆんそのこるゝよせよとして給ひ釈迦如来碎れ
の舍利ありとうこうまう〜あり圓善上人遺跡の
曼陀羅の御ようを秘のせ〜まけれ

仙光院

おく〜坊の御ありるべ〜は法ぐうあるべ
仙光院ハ凡光法師住給ひ〜凡よあり極樂ハ
南よありて稱光法師の住給ひ凡あ院元善る
の間よありと御願凡ぐよ凡〜うり釈書又佛法
傳通記等よハ禮光日本往生傳よハ頼光とく
きうり凡二法師ハ智義よ三論の深旨をぐ
きてやむどるく海ゆせは世よ二光とぐん

ひける 欄書 山二法師ハ大化年中乃人にて行基
ゟ水流よかるべき伝れども大化乃ゟハ此七代者
德天皇乃御宇より敎書よりゟバ四十余代聖武
天皇乃御宇乃人とゝゝり山法師年ゟり靈
験ハ三論をゝけ法ゞれゝり今の三福家皆是
乃也ゝるべき伝敎 欄書

## 妙楽院

山法師西乃新屋敷に町あり
妙楽院ハ元興寺の院内護命僧正乃住院
護命ハ藤氏房濃の出者藤乃人年ゟり
て元興寺乃別当大法師ゟ法ゝて吉野山の
苦行又法相大乘法華ゟび月乃上経ゟ山
ゟゝ入てとこゝひゝ経ゟは本寺ゟゝりて

海をゝ又教法ゟ法中ゟ仏舎利一粒を元ゝり
その後以ゟ一粒をえゝり霊異ゟ多ゟ
ゝる天長四年僧正ゟ年八十ゟ入てこの
院ゟとゝる海部ゟゝりて同寺の僧義学
上寺ゟり来ゟ音声院中ゟ響ゟ
聞乃もゝひ天人の楽ゟ伝乃 須日本紀 又世ゟ法さ
へて法海味乃とゝゝゝ護命僧正乃ゝ
法ゝゝゝゝゝゝ護命味乃とぞ伝ひける

## 禅院寺

山法師ゟ元興寺乃別院ゟ禅院寺ゟ敎書
ゟ右京ゟ多ゟ元ゝゝ伝れども
一乘山迦ゟ法ゟゝゝゝゝ法ゟ一
往ゟゝゝ

猶院寺は元興寺の別院なり道昭法師より後朝夫て本元興寺の東南のほとりにあるなり道昭法師本願記に真男の舎利一四粒論を納めしとのそしるしあれとも時代年紀よりやあらん

乃右京より猶院を建立とあり 実録 三代 実録 歟書

奈良の菊多 元興寺の里とあり

万葉 草根 奈良の菊多はあれど君丹者 明日者 とこらくの

同 草根 時のよりしあもうへしてさかりの盛の西の菊

菊多の川 元興寺の西のやりよりやそ記ぐれ



あり奈良乃菊多の川とは川の世よりくはひるるやうや奈良の菊多のほとは川を記

草根 あ我と右孫うをもとくて作

草根 もう今うの菊測をもよんあるうの明日香よりはるるの

山南は猫智院あり本仏乃地蔵をとなへうり

十輪院

元興寺乃東にあり僧は十輪院と所の名ふ十輪院は弘法大師乃開基とはいもこそあらめ御堂をもとの石のて作くれけるゑ世の人乃るそべ紀年をもとくぞその内は石仏乃地蔵を乃三四尺ばかりをもとくて作くつとそんくまてく



院内は朝野宿禰奥養の撰とんふあり碑

銘ハ
り果ぬるバ一字ばかりぞ
山南ハ南光院と申あり元興寺の道服
法師乃ものゝ道服ハ文政四年中
元興寺にて入寂乃ち新書にかくこゝ
そなたより十七年を経て霊亀二年に新元
興寺建立乃ち 續日本紀にあり本元興
寺にて新寺にうつ
れしこゝにてあらこゝあ給ふべし

和州旧跡幽考第三巻終